



(2002年8月)

【名誉会員・永年会員・日本農学賞受賞者の略歴とお話】

名誉会員 加藤 肇



昭和6年5月5日兵庫県生まれ。昭和31年京都大学農学部農林生物学科卒業，昭和33年同大学院修士課程修了。国家公務員上級試験に合格。昭和33年から農林省東北農業試験場栽培第一部〈大曲〉。科学技術庁長期在外研究員として米国コネチカット州立農業試験場客員研究員。昭和42年より農業技術研究所，

昭和54年より農事試験場，昭和56年より農業研究センター，昭和61年より農業環境技術研究所，昭和62年より農業研究センター，平成元年より神戸大学農学部教授として勤務，平成7年同退職。平成6年より関西学院大学非常勤講師，現在に至る。昭和48年農学博士。昭和57年植物病理学会賞。平成8年日本農学賞・読売農学賞，平成10年兵庫県科学技術賞，平成14年日本植物病理学会論文賞受賞。この間，学会幹事長，評議員，学会長，第五回国際植物病理学会運営委員，国際植物病理学会評議員・疫学部会委員・世界食糧安全問題検討会委員。また，日本植物防疫協会試験委員会総括委員長，理事などを歴任。また国際協力事業団，文部省などの委嘱で，インド・フィリピン・韓国・中国・マレーシア・タイ・インドネシア・ブラジル・ブータン・コートジボアール・タンザニアなどで稲などの病害発生調査・予察・防除に関わってきた。また，国際稲研究所の各種シンポジウムや各種国際会議で研究業績の公表を行った。派遣先では片手間に菌の収集に努めた。大学では JICA 研修コースを設立した。

私は，農水省の研究機関にあって，稲・麦・飼料作物の病害につき基礎・行政対応の研究を行った。特に就職以来「いもち病」が常に中心にあった。稲の体質と発病の関係，疫学的な研究，特に発生実態の数量化につとめた。完全世

代の追及は，イネのみならずイネ科植物に寄生する総てのいもち病菌の特性解明に発展した。植防協委託の農業圃場試験により，試験法，農家対応のための情報を得た。大学に移り，いもち病菌の系統発生に関する考えをまとめた。また，ミクロコニディアの発見により，生殖を一つの柱として実施してきた研究史に一応の終止符を打つことができた。兵庫県では，産官学共同「生物的防除」研究の一端を担った。昨今，学会発表のテーマも多様化してきた。どのようなアプローチであれ，宿主・病原体の関係解明を据え，コッホの三原則を忘れず，暇を見つけては色々な環境下で病原体の接種試験をしてほしい。

永年会員 井上忠男



大正15年12月6日鹿児島県で出生。第七高等学校（旧制）を経て昭和27年東京大学農学部農学科を卒業。同年岡山大学大原農業研究所（昭和28年に農業生物研究所と改称）助手，昭和35年助教授。昭和48年に大阪府立大学農学部に移り，昭和53年同教授。昭和61年同附属農場長，昭和62年～平成2年同農学部

長。平成2年同大学定年退官，名誉教授。平成2～4年大阪府農林水産部研究開発担当顧問。非常勤講師を勤めたのは鳥取大学，岐阜大学の各農学部，名古屋大学，琉球大学，九州大学の各大学院農学研究科，岡山大学資源生物科学研究所，ノートルダム清心女子大学など。昭和36年農学博士（麦斑葉モザイク病の研究）。昭和44年日本植物病理学会賞受賞（日本マメ科植物ウイルスの同定分類に関する研究）。平成3年日本農学賞，読売農学賞受賞（日本産植物ウイルスの同定，分類，診断に関する一連の研究）。日本植物病理学会役員歴としては，昭和47～52年 IAMS ウイルス命名委員会委員，昭和55～63年植物ウイルス分類委

員会委員長，昭和50～52年対外連絡委員，昭和51～56年編集委員，昭和53～58年病名調査委員，昭和55年～平成3年評議員，昭和63年～平成3年関西部会長など。昭和26年秋季関東部会で卒業論文実験結果の一部を発表したのが私にとって初めての学会活動でした。それから50余年の間，恩師の明日山秀文先生，西門義一先生をはじめ多くの先輩，友人，仲間のご教示ご協力を得て，有意義で良い「植物病理学人生」を送らせていただきました。このたび永年会員に推挙されましたが，あらためて皆様に御礼を申し上げますとともに，学会の一層の充実とご発展をお祈りいたします。

永年会員 長江春季



昭和2年3月21日三重県に生まれる。昭和25年三重農林専門学校農科卒業，同年農林省東海近畿農業試験場に採用され，主にコムギ赤黴病の防除，コムギ縞萎縮病の発生と土壌との関係について研究を行った。この間，専門技術員，農業改良研究員の資格を取得した。昭和37年8月，農

林水産省九州農業試験場畑作部（都城市）に異動し，主にナタネの菌核病を対象に発生生態や石灰窒素等による防除技術について研究をすすめた。昭和46年7月に三重県職員となり，農業技術センター紀南かんきつセンター病害虫専門技術員，48年同生産環境部病害研究室長，57年同環境部長兼農業経営大学校教授となった。県へ赴任して早々にナシ産地では黒星病が多発し，その原因がベンズイミダゾール系の薬剤耐性菌によることを明らかにした。時を同じくして富山県他でも問題となり，全国的な耐性菌問題研究ネットワークに参画した。また，養液栽培において一度発生すると甚大な被害をもたらすキュウリ疫病菌の動態を明らかにするとともに紫外線とフィルターを使った防除システムを開発し，先駆的な取り組みではなかったかと自負している。当時から県では地域特産物の育成に力を入れており，ナバナ（花蕾等を食用にするナタネ）の根こぶ病の発生生態と防除技術の開発，当時のウイルス研究所の協力をえてTMV弱毒ウイルスのミエファースト（トマト）への利用等々，現場に密着したなかで多様な作物の病害を対象に所属を越えた研究員の仲間の協力を得て研究を続けてきた。県では本来の研究に加え，現場から持ち込まれる病害診断や普及・行政への対応も多く課せられ，やりがいを感じ

しながらも忙しく過ごしたことが思い起こされる。個人的な趣味として，同好の友人と早くから無線電を楽しんだほか，当時としては一般的なツールになっていなかったパソコンを利用した気象観測解析ソフトを開発し，いち早く研究場面に導入したことも懐かしい。パソコンは現在も日常生活の中で離せないツールとなっている。

最近の科学の進歩はめざましく，植物病理学の分野も同様で学会誌を見ても戸惑うことが多い。次代につながる日本農業を目指して頑張ってください。

永年会員 下村 徹



大正15年11月30日東京生まれ。麻布中学，成城高校理科甲類を経て，昭和22年7月東北大学農学部入学。農産製造学を専攻していたが，卒論では植物病理学の田杉平司教授のもとで「サツマイモつる割病菌のセルロース分解力」，大学院では三澤正生助教授のもとで「イネごま葉枯病感染の生理」のテーマ

で研究を行った。昭和29年2月名古屋大学助手となり，平井篤造教授のもとで「ウイルスの感染と化学物質に関する研究」に従事し，このテーマで昭和36年12月学位を取得した。昭和38年2月農林省農事試験場へ出向，「組織培養法によるウイルス罹病植物の無毒化」の研究に従事。昭和42年1月植物ウイルス研究所へ転出し，伝染研究室長として「ウイルスの感染と治療に関する研究」を行った。この間，オランダ国立農科大学で客員研究員，名古屋大学（ウイルス学）と千葉大学（園芸繁殖学）で非常勤講師。昭和57年10月野菜試験場環境部長へ転出。昭和58年3月「タバコモザイクウイルスによる局部病斑の形成に関する研究」で日本植物病理学会賞受賞。植物ウイルス研究所在任中に学会の会計幹事，野菜試験場在任中に評議員を務めた。昭和62年3月農水省退職，同年4月日本植物防疫協会研究所調査役となり，抗植物ウイルス剤の開発などに従事。平成元年4月東京農業大学に新設された生物産業学部生物工学研究室の教授となり，バイオテクノロジー関連の研究を行った。平成9年4月から14年3月まで同大学客員教授。

一貫したテーマで研究が続けられなかったため，自分の納得がいく成果をあげられず，学会への貢献も少ないことが悔やまれる。平成9年3月に大学を定年退職してからは，若い人たちの教育でお役にたちたいと思い，東京医薬専門学校で5年間毎週講義を担当，この間に「バイオテク

「ノロジの基礎理論」(誠文堂新光社)と「クローンのはなし」(技報堂出版)を出版した。長い間籍を置いている学会では、今更何のお役にもたてないのは淋しいことである。

永年会員 土屋行夫



1926年9月2日日本郷区追分町15番地に生まれる。1934年4月本郷区追分尋常小学校に入学、1940年3月追分尋常小学校卒業、1941年4月東京都立園芸学校に入学、1945年3月4年終了、1945年4月東京農林専門学校入学、1948年3月卒業、1948年4月に農林水産省農事試験場病理部に就職、1951年4月農林

水産省農業技術研究所病理昆虫部、1984年12月農林水産省農業環境技術研究所環境生物部、1988年3月定年退職、現在に至ります。学会役員歴はありません。学会誌発送のお手伝い、学会開催のお知らせ発送のお手伝いをしました。在職中、イネ白葉枯病、麦類黒節病、ジャガイモ軟腐病の研究、野菜・花卉の細菌病菌の分類同定、菌株の乾燥、凍結による保存方法の研究を退職時まで行いました。現在、樹木医の資格をとるべく勉強しております。日本植物病理学会の発展と会員の皆様のご健闘をお祈り致します。

永年会員 山本英夫



大正15年4月29日岡山市で出生。昭和18年岡山県立高松農学校卒業。昭和19年1月岡山県立農事試験場病理昆虫部勤務、農作物病害防除に関する試験研究に従事、昭和25年から病虫害発生予察を担当、昭和46～50年病虫害専門技術員で農試兼務、昭和51年農試復帰、昭和62年3月退職。農試に入ってから、ノネズミ防除用務を手伝った。ノネズミ防除は他府県でも病理が担当したが、この用務で他の試験研究では入手困難な諸物資を確保することができた。イネ白葉枯病；昭和23年ごろ麦間直播栽培で大発生してから、発生生態、発生予察、品種、防除と最も永くかわることとなった。ムギ類黄さび病；病虫害発生予察特殊調査として担当したが、本県の黄さび病第一次伝染源は海外から飛来する可能性が高い。

しかし、冬胞子が極めて高率に発芽することから、中間宿主の究明が望まれる。オオムギ萎縮病；ビール麦が茶褐色となって枯死するものが多発し、本病によりえそ病徴となったためと判明した。栽培品種を交Aとするようになって多発した。岡山大学農業生物研究所(岡山大学資源生物科学研究所)と共同研究で、800品種・系統を検定した結果。交Aは最弱を示し、高橋隆平博士は遺伝子分析から「交Aは世界中で一番弱い品種です」と言われた。なお、高度抵抗性を示した木石港3は、抵抗性品種ミサトゴールデン等の交配母本に使用されている。病虫害同時防除の体系化；铸方末彦場長から、水稻病虫害の防除回数(特に出穂後)を減らすように絶えず指摘されていた。穂いもち防除に、穂ばらみ期2回散布は穂ばらみ期と穂揃期の2回散布と同等の効果と認めたので、穂いもち2回散布のうち1回をニカメイチュウの防除適期に充当した。さらに穂いもち、紋枯病、ニカメイチュウでも同時防除が可能となった。ハクサイ黄化病；昭和57年に初発を認め、東日本の発生生態とは異なることを明らかにした。近くに自生するハマダイコンが伝染源となること、その罹病植物は海を漂流して分布を拡大することがわかった。

永年会員 吉田孝二

永年会員 吉田孝二



大正15年6月10日、東京に生まれる。昭和22年東京大学農学部農学科に入学、明日山秀文教授の指導を受けて昭和25年卒業、機構改革でこの年発足した農林省農業技術研究所病理昆虫部病理科(西ヶ原)に採用される。向 秀夫科長(室長兼務)の指導を受け、植物細菌病の防除について研

究。水稻白葉枯病に対する品種間抵抗性の差異についての研究では、初めて多針式接種法を利用した。昭和29年東北大学農学部(助手)に転勤し、田杉平司教授、三澤正生助教授のもとで稲病害、特にいもち病についての研究に携わり、昭和37年「稲熱病による稲のズリコミ症状に関する研究」で東北大学より農学博士の学位を受けた。昭和40年、再び農林省に戻り、農薬検査所の生物課長として伊東富士雄化学課長と共に、直前に赴任された鈴木照磨所長を補佐し、植物防疫行政の技術面を担当することになった。行政は初めてで不安があったが、丁度この時期、農薬は発展期から安全性評価への切り替わり時期にあり、不安を考える

余裕はなかった。昭和38年の農薬取締法改正に伴う魚介類への危被害防止の対応、水銀剤代替農薬への移行措置に伴う多数の登録申請農薬の審査、有機塩素系農薬（DDT, BHCなど）製剤の廃棄措置、二次薬害の解明と防止対策と、今考えても困難な行政措置が続いた。昭和46年の法改正では、残留農薬の安全性確保のため、適用病害虫の表示と使用制限について厳しい条項が入ることが予測されたことから、その対応として、予め3年に亘り準備をし、多くの関係者の協力を得て登録すべき主要病害虫の選定を行った。結局担当者の努力により、法律による使用制限は適正使用の遵守となったため、この成果の一部は目的を変え、資料「主要病害虫に適用のある登録農薬一覧表」として昭和46年10月1日、農薬検査所から配布された。昭和51年初代の企画調整課長、昭和53年初代の検査部長、昭和55年所長を歴任し、昭和57年退官した。退職後は（財）日本植物調節剤研究協会常務理事（昭和57～平成2年）、（財）報農会常務理事（平成3～5年）理事長（平成5～12年）を勤め、平成12年退任した。振り返って、私の歩んだ全ての道で、実に多くの学会員の皆様、植物防疫関係者の皆様からご指導、ご協力を賜ったことを思い感謝の他はない。（学会評議員2期）

日本農学賞受賞者 大内成志



昭和8年1月9日広島市において出生。本籍は愛媛県越智郡大三島町大見。香川県立農科大学を経て、京都大学大学院農学研究科（農林生物学専攻）修士課程を昭和32年3月修了。昭和63年6月米国南イリノイ大学大学院微生物学専攻博士課程において医学微生物学を学んだ後帰国、同年7月京都大学農学部助

手に任官、赤井重恭教授に師事。昭和45年4月岡山大学農学部助教授、昭和60年4月近畿大学農学部教授。平成13年3月同大学を定年により退職と同時に同大学大学院特任教授、平成14年3月に特任退職。平成13年8月米国オレゴン州立大学客員教授、現在に至る。非常勤講師：名古屋大、神戸大、香川大、京都府立大、岡山大、北海道大、鳥取大、佐賀大。近畿大学においては、農学研究科長、農学総合研究所長、生物理工学部設立準備委員、組換えDNA実験安全主任者、大阪TLOコーディネーターなどを歴任、名誉教授。学会活動：日本植物病理学会庶務幹事、編集幹事長、評議員、関西支部長、会長、英文誌発刊準備委員会委員、国際植物病理学会評議員、第1回アジア植物病理学

会議副会長。Molecular and Physiological Plant Pathology 編集委員。第1回～第8回日米科学セミナーに講演者・組織委員・組織委員長として関与（1966～1999）。第2回～第7回国際植物病理学会議に参加・発表、NATO国際研究集会等国際シンポジウムに参加・講演。米国、カナダ、英国、ドイツ、イタリア等多くの国の大学・研究所・研究集会等において講演した。受賞：日本植物病理学会賞（1986年）、アメリカ植物病理学会賞（フェロー）（1996年）、日本農学賞・読売農学賞（2002年）。研究：感染を宿主と病原体の遺伝子相補反応として把握し、主としてオオムギうどんこ病を研究材料として感染機構を研究。宿主・病原体相互反応の分子機序解明の基礎となる受容性の概念の提唱と実証した。

希望：植物病理学は畢竟（ひっきょう）病害防除に基づく食料生産の量的確保を通じて人類の生存に貢献する学問であることを再認識して、研究・教育の国際的評価を高めるとともに、アジアにおけるこの分野のリーダーとして機能することを希望します。

【平成14年2月～5月の学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成14年度の大会は、4月3日から5日までの3日間、吹田市千里万博公園のオオサカサンパレスで開催した。大阪での大会開催は、本学会の創立以来初めてだそうである。大会参加者947名、一般講演412題、懇親会参加者544名と、予測を越える多くの方々に参加していただいたが、天候にも恵まれ、事故もなく、無事に会を閉じることができた。スムーズな運営ができたのは、座長、運営委員、学生アシスタント、そして会場スタッフの皆さんのお蔭である。支援をいただいた諸団体、懇親会ですてきな演奏をしていただいたバンドの皆さんにも、改めてお礼を申し上げます。

会場の都合で講演会場がやや狭く、聴衆が入りきれない場合があったことは、予想していたこととは言え申し訳なく思っている。一方、懇親会のパック料金の宴会料理はすくなくなるのではないかと心配していたが、杞憂に終わってほっとした。快適なロビーや屋外スペースも、ディスカッションを深めることに役立ったのではないかと思っている。今回の新しい試みは、講演申込みを電子メール添付で行ったことである。わずかに文字化けや受け付けミスもあったが全体としてはほぼ問題なく、締切日も例年より2週間ほど遅くすることができた。電子ファイルがあったのでプログラム作りも順調にできたし、講演要旨集もパソコン上で、早く、低価格で作成できた。かなりの緊縮財政では

あったが、大学外の会場を使っても、工夫次第では何とかなるものだというのが実感である。ただし、スタッフが2人しかいない大会事務局で、プログラムの編成や座長の依頼、編集要旨集の作成まで行うというのはやや過重であった。他の学会のように、会場の準備・大会の運営とプログラムの編成・要旨集の作成とを別々の組織で行うことも検討してみてもよいのではないかと考えている。懇親会に来賓として出席した学長が話したことでもあるが、若い参加者の比率が高く、若い参加者が懇親会にもたくさん参加していることは、本学会が若々しく、エネルギーに溢れていることの現れであると思う。本学会の力強い発展にわずかでもお手伝いができたとすれば、望外の喜びである。

(大木 理)

2. 研究会開催報告

(1) 第5回植物病害生態研究会

第5回植物病害生態研究会は、平成14年4月6日(土)に大阪府立大学で67名が参加して開催された。今回は「種々の伝染経路を持つ病害の生態」とのテーマで5名の方の講演を行った。講演は、島根農試の塚本俊秀が「ユリ類葉枯病の生態と防除」、福岡農総試の梶谷裕二が「キクイムシ類によって媒介されるイチジク株枯病の生態と防除対策」、大阪府大滞在中のH. M. A. Abdelzaher氏が「エジプトのピシウム病の発生態」、近中四農研の宮川久義氏が「イネ苗立枯細菌病菌のため池水及び田面水からの検出と地域分布」、野菜茶業研の木嶋伸行氏が「土壌からの特定細菌の検出」と題して講演を行い、総合司会を中島 隆氏(九州・沖縄農研)が務めたほか、中村仁(生研機構)、井上幸次(岡山農試)、東條元昭(大阪府大)、中島 隆(前出)、対馬誠也(農環研)の各氏に座長を務めていただいた。それぞれのテーマに関して、非常に活発な総合討議がもたれた。今回は大会翌日(3月31日)に明治大学(神田)において、「植物ウイルス病の生態」(仮題)とのテーマで開催する予定である。なお、当日は研究会の総会を企画している。また、若手の学会員の方で研究会の幹事として企画・運営を希望される方は東北農研の石黒まで申し出て頂きたい。

(石黒 潔)

(2) 第12回殺菌剤耐性菌研究会

平成14年4月6日、大阪府立大学キャンパスで103名の参加を得て開催された。「大阪府における殺菌剤耐性菌への取り組み」を大阪府立食とみどりの総合技術センターの岡田清嗣氏が、「タマネギ灰色腐敗病菌のベンゾイミダゾール系殺菌剤耐性」を兵庫県立農林水産技術総合センターの西口真嗣氏が紹介した。また、新規殺菌剤に関しては、「シフ

ルフェナミド(パンチョ)感受性検定法とベースラインデータ」が日本曹達(株)の原本雅昇氏により話題提供された。次に、「ナスすすかび病菌の殺菌剤耐性」のうち、DMI剤について佐賀県農業試験研究センターの山口純一郎氏が、ストロビルリン系殺菌剤について高知県農業技術センターの矢野和孝氏が紹介した。続いて、最近実用化技術ともなっている「遺伝子診断法による黒あし病菌の識別とジャガイモ塊茎からの検出」を北海道立中央農業試験場の田中文夫氏が、「殺菌剤耐性菌の遺伝子診断」を農業環境技術研究所の石井英夫が、さらに、「カンキツ緑かび病菌におけるステロール脱メチル化酵素遺伝子の大量発現と、DMI剤耐性の遺伝子診断」が理化学研究所の濱本 宏氏によって講演された。それぞれの講演の後、活発な質疑応答が行われた。なお、講演要旨集(1部2,000円)をご希望の方は、研究会事務局(農環研農薬影響軽減ユニット、TEL & FAX: 0298-38-8307, E-mail: hideo@niaes.affrc.go.jp)までご連絡下さい。

(石井英夫)

(3) 第6回植物ウイルス病研究会

今回の研究会は4月6日に、堺市の大阪府立大学学術交流会館で開催された。参加者は約160名であった。「最近話題の植物ウイルス病」のセッションでは、トスポウイルス病(奥田 充氏)、レタスビッグベイン病(笹谷孝英氏)、チューリップ微斑モザイク病(守川俊幸氏)について、新興感染ウイルス病としての現状と課題が示された。次の「バイオテクノロジー」のセッションでは、鈴木信弘氏によりハイポウイルスによるクリ桐枯病のアメリカでの生物防除の状況が紹介された。恒例の「特別講演」では、大阪府立大学獣医学専攻の馬場栄一郎氏により鶏卵のサルモネラ食中毒菌についての研究紹介があり、ソウル大学のK.-H. Kim氏によりPVXの複製制御因子についての最新の成果が示された。「植物ウイルス抵抗性の分子機構」のセッションでは、*Cucumis figarei*の抵抗性(小堀 崇氏)、CMV-シロイヌナズナでの抵抗性(高橋英樹氏)、TMV感染タバコにおける過敏感反応(大橋祐子氏)の興味深い講演があり、活発な議論が交わされた。

韓国植物ウイルス病研究会との交流も定着し、韓国側からは今回はK.-H. Kim氏を含めて6名の参加者があった。来年は日本側から何人かが韓国の研究会に参加する予定である。なお、今回の研究会は開催地幹事が大会委員長と重なったため、プログラムの編成、講演要旨集の作成などについては夏秋知英氏に担当していただいた。講演要旨集(1000円)をご希望の方は、下記までご連絡いただきたい。

E-mail: ohki@plant.osakafu-u.ac.jp

(大木 理)

【学会関連各委員からの報告】

1. 第5回日本学術会議植物防疫研究連絡委員会報告

(平成14年3月22日(金)開催)

1) 池田俊弥委員より「松くい虫問題の国際化と検疫措置」という演題で、ヒアリングの話題提供をしていただいた。2) 委員長から、学術会議総会・連合部会および同第6部会について、(1)「日本学術会議の在り方について」総合科学技術会議での検討に併行して学術会議で改革案を検討中であること、(2)日本学術会議第19期会員選出のための学術研究団体の登録申請手続きを5月31日までに行うべきこと、が報告された。3) 科学研究費補助金の「系・部・分科・細目」の平成15年度改正に伴う審査委員候補の推薦について話し合った結果、次のような合意が得られた。(1)細目「植物病理学」の1段審査委員の定数6名(候補は2倍数)の学会への割り振りは、植物病理学会5名、農薬学会1名とし、応用動物昆虫学会からは3名の委員を蚕糸研連を通じて細目「応用昆虫学」に、雑草学会からは1名の委員を作物研連を通じて細目「作物学・雑草学」に、農薬学会からは1名の委員を発酵研連を通じて細目「生物生産化学・生物有機化学」に、それぞれ推薦する。(2)細目「応用分子細胞生物学」の1段審査委員は、8研連に対し6名の割り当てがあり、その調整は8研連のバランスや候補者の大学間バランスを考慮して窓口研連が行うが、植物防疫研連では15~16年応動昆、17~18年農薬、19~20年植物病理の順で審査委員1名(候補2名)を推薦する。(3)分科「農学」の2段審査委員は、5研連に対し4名の割り当てがあり、その調整は5研連のバランスや候補者の大学間バランスを考慮して窓口研連が行うが、植物防疫研連では植物病理から審査委員1名(候補2名)を推薦する。なお、応動昆は蚕糸研連経由で農学2段審査委員1名(候補2名)を推薦する。(4)分科「境界農学」の2段審査委員は、8研連で定員2名の割り当てがあり、その調整は8研連のバランスや候補者の大学間バランスを考慮して窓口研連が行うが、植物防疫研連では植物病理、応動昆、農薬の順で輪番で審査委員候補1名(候補1名のみ)を推薦する。4)平成14年度植物保護・環境シンポジウム(第7回)の開催計画について検討し、下記の内容で準備を進めることにした。

時 期：平成14年11月15日(金) 13:00~17:00

会 場：日本学術会議講堂

テーマ：「ゲノム研究からみた植物保護技術の展望」

(仮題)

1. ゲノム創農薬の可能性と展望(担当：農薬)
2. 病原微生物におけるゲノム研究の現状とその植物保

護への応用

(担当：病理)

3. 昆虫におけるゲノム研究の現状とその植物保護への応用 (担当：応動昆)

4. 植物におけるゲノム研究の現状とその植物保護への応用 (担当：幹事)

経費分担：応動昆・病理・農薬学会；各15万円，他学会；各約3万円

(日比忠明)

2. 日本学術会議微生物学研究連絡委員会報告

平成14年3月18日(月)に開催された標記委員会の議事要旨は以下の通りである。

1) 委員長から、学術会議総会及び第6部会の報告があり、日本学術会議のあり方について活発に検討されており、現在の検討の進展によっては第19期の学術会議と全く異なる形になる可能性があるとの紹介があった。2) 委員長から、バイオテロリズム関連の討議を当研連と第7部免疫・感染症研連の合同で、BSE関連の討議を第6部及び第7部の関連分野の委員長より構成された委員会で、いずれも学術的見地から提案を行うべく、調査が進められているとの紹介があった。3) 平成15年度の科学研究費補助金の内、微生物関連と考えられるいくつかの細目に、当研連からも審査委員候補者を推薦するため、各学会から推薦者を出すように要請があった。4) 2002年7月27日~8月1日にパリで開催される国際微生物学連合(IUMS)総会について、再度案内があった。また、2003年10月16~28日にマレーシアのクワラルンプウルで開催されるアジア太平洋微生物学連合(FAPMS)の次期総会は、マラヤ大学のDr. Sabaratnam Vikineswary (viki@biology.um.edu.my)が事務局を担当しているとの報告があった。Plenary Lecturerとして、本学会から医学系の竹田先生を推薦する事とした。5) 次回の委員会で、微生物学研連主催の公開講演会等を企画しているので、一般対象あるいは研究者対象を含めて検討を願いたいとの依頼があった。(露無慎二)

3. 日本農学会報告

平成14年度農学会大会

日 時：平成14年4月5日

会 場：東京大学山上会館

本年度の日本農学賞および第39回読売農学賞の受賞者は次の7氏である。

- 1) 生産のための先進的計画：リモートセンシングによる予測と評価

システム農学会：岐阜大学流域環境研究センター教授

秋山 侃

2) 宿主植物・病原体特異性決定機構に関する基礎的研究

日本植物病理学会：近畿大学大学院農学研究科教授
大内成志

3) エキノコックス生態解析と汚染環境の修復

日本獣医学会：北海道大学大学院獣医学研究科教授
神谷正男

4) 農業生産基盤における地盤工学に関する研究

農業土木学会：元岐阜大学教授 仲野良紀

5) 先端家畜繁殖技術を応用した希少動物の保護・増殖に関する研究

日本家畜学会・日本家禽学会・日本繁殖生物学会：
九州大学農学部教授 藤原 昇

6) ラッカセイ品種の系統分類と作物学的特性の解析ならびに「Ideotype」の実証に関する研究

日本作物学会：高知大学名誉教授 前田知美

7) 魚類配偶子形成機構の解析とその応用に関する研究

日本水産学会：北海道大学大学院水産科学研究科教授
山内 皓平

また、同日午後「21世紀における循環型生物生産への提言」というテーマでシンポジウムが開催された。

【今後の本学会の活動予定】

1. 平成15年度大会開催予定

平成15年3月28～31日

詳細については日本植物病理学会報（和文誌）68（3）
掲載予定

2. 平成14年度部会開催予定

(1) 北海道部会：平成14年10月24日～25日，北海道農業
研究センター（札幌市）

(2) 東北部会：平成14年9月26日，プラザおでって
（盛岡市）

(3) 関東部会：平成14年9月27日～28日，千葉大学
（松戸市）

(4) 関西部会：平成14年9月28日～29日，三重大学
（津市）

(5) 九州部会：平成14年9月19日～20日，高城会館
（諫早市）

【関連学会研究集会情報】

1. 植物微生物研究会第12回研究交流会

日 時：10月11～13日（金～日）

場 所：かずさアーク県立ホール中会議室（木更津市）

問合せ先：鹿児島大学理学部生物学科

内海俊樹

E-mail: uttan@sci.kagoshima-u.ac.jp

Fax：099-285-8163

<http://www.affrc.go.jp:8001/jspmi/>

2. 第2回糸状菌分子生物学コンファレンス

日 時：11月11日～12日

会 場：名古屋大学東山キャンパス（名古屋市千種区）

問合せ先：名古屋大学大学院生命農学研究科

分子細胞機構学講座 小林哲夫

TEL：052-789-5744

または、東京農工大学農学部植物病理学研究室

有江 力

TEL：042-367-5691

<http://www.biochem.osakafu-u.ac.jp/~fmbjsj/>

【今後の関連国際研究集会情報】

1. **Barley Yellow Dwarf Disease: Recent Advances and Future Strategies:** CIMMYT, Mexico, September 1-5, 2002.

→<http://www.cimmyt.cgiar.org/Research/Wheat/>

[Conf_BYD_02/index.htm](http://www.cimmyt.cgiar.org/Research/Wheat/Conf_BYD_02/index.htm)

2. **Conference of European Foundation for Plant Pathology—Disease Resistance in Plant Pathology—:** Prague, Czech Republic, September 9-14, 2002.

→<http://www.EFPP.NET>

3. **6th International Conference on Pseudomonas syringae Pathovars and Related Pathogens:** Maratea, Potenza, Italy, September 15-19, 2002.

→<http://www2.unibas.it/utenti/pseudomonassyringae/>

4. **International Rice Congress 2002:** Beijing, China, September 16-20, 2002.

→<http://www.irri.org/irc2002/index.htm>

5. **Asian Congress of Mycology and Plant Pathology—Plant Health for Food Security—:** Mysore, India, October 1-4, 2002.

→<http://www.appliedbotany.com/sabb.html>

6. **3rd Asia-Pacific International Mycological Conference on Biodiversity and Biotechnology (AMC2002):** Kunming, China, November 4-8, 2002.

→E-mail: amc2002@china.com

7. **1st International Conference on Tropical and Subtropical Plant Diseases:** Chiang Mai, Thailand, November 5-8, 2002.

→<http://www.disc.doa.go.th/diseases>

8. **The BCPC (British Crop Protection Council) Conference 2002 —Pests and Diseases—:** Brighton, UK, November 18-21, 2002.

→<http://www.bcpc.org/otherevents/index.htm>

9. **The 8th International Congress of Plant Pathology (ICPP):** Christchurch, New Zealand, February 2-7, 2003.

→<http://www.lincoln.ac.nz/icpp2003/>

【会員の動静】

1. 人事

(1) 大学関係

夏秋啓子	H13.10	東京農業大学 国際食料情報学部 熱帯作物保護学研究室教授
池上正人	H14. 3	東北大学 大学院農学研究科植物病理学分野 教授
山次康幸	H13.11	東京大学 大学院農学生命科学研究科 植物病理学研究室助手
佐野義孝	H14. 2	新潟大学 農学部 植物病理助手
大森 拓	H14. 4	宇都宮大学 遺伝子実験施設助手
岸本久太郎	H14. 6	山口大学 農学部 科学技術振興事業団派遣研究員
長尾英幸	H14. 3	筑波大学 農林学系 退職
松下保彦	H14. 4	東京農工大学 遺伝子実験施設 教授

(2) 農水省研究機関関係 (平成13年4月1日現在)

大木健広	H13. 8	中央農業総合研究センター病害防除部病害防除システム研究室
工藤 晟	H13. 9	退職 (果樹研究所 生産環境部長)
西口正通	H13.10	愛媛大学教授 (農業生物資源研究所)
門田育生	H13.10	東北農業研究センター 畑地利用部 畑病虫害研究室長
平八重一之	H13.10	九州沖縄農業研究センター 企画調整部 研究企画科
野田千代一	H13.10	国際農林水産業研究センター 企画調整部 国際研究調整官
岩波 徹	H14. 2	九州沖縄農業研究センター 地域基盤研究部 病害遺伝子制御研究室長
花田 薫	H14. 2	農業生物資源研究所 企画調整部 企画室 植物企画連絡科長
河本征臣	H14. 3	退職 (九州沖縄農業研究センター 地域基盤研究部長)
我孫子和雄	H14. 3	退職 (野菜茶業研究所 果菜研究部 病害研究室長)
佐藤章夫	H14. 3	退職 (北海道農業研究センター 生産環境部 病害研究室主任研究官)
後藤孝雄	H14. 3	退職 (近畿中国四国農業研究センター 特産作物部付)
大橋祐子	H14. 3	退職 (農業生物資源研究所 分子遺伝研究グループ 上席研究官)
松田 泉	H14. 3	退職 (農業環境技術研究所 企画調整部 研究交流科長)
並木史郎	H14. 4	退職 (九州沖縄農業研究センター 地域基盤研究部 病害生態制御研究室主任研究官)
皆川 望	H14. 4	九州沖縄農業研究センター 地域基盤研究部長
佐藤 守	H14. 4	農業生物資源研究所 昆虫適応遺伝研究グループ長
園田亮一	H14. 4	中央農業総合研究センター 北陸研究センター 企画調整部主任研究官

中保一浩	H14. 4	中央農業総合研究センター 病害防除部 土壤病害研究室 主任研究官	近藤 篤	H14. 4	滋賀県農産流通課
安田伸子	H14. 4	中央農業総合研究センター 病害防除部 糸状菌病害研究室	田中 寛	H14. 4	大阪府立食とみどりの総合技 術センター農業大学校
島根孝典	H14. 4	果樹研究所 企画調整部 研 究企画科主任研究官	嘉儀 隆	H14. 4	大阪府立食とみどりの総合技 術センター所長
佐藤 衛	H14. 4	野菜茶業研究所 葉根菜研究 部 病害研究室主任研究官	草刈眞一	H14. 4	大阪府立食とみどりの総合技 術センター農業技術指導部
白川 隆	H14. 4	野菜茶業研究所 葉根菜研究 部 病害研究室長	瓦谷光男	H14. 4	大阪府立食とみどりの総合技 術センター都市農業部
西 和文	H14. 4	野菜茶業研究所 果菜研究部 病害研究室長	岡田清嗣	H14. 4	大阪府立食とみどりの総合技 術センター都市農業部
中山尊登	H14. 4	北海道農業研究センター 生 産環境部 病害研究室主任研 究官	合田 薫	H14. 4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター 病虫害防除部主幹研究員
福本文良	H14. 4	北海道農業研究センター 生 産環境部 ウイルス病研究室 長	相野公孝	H14. 4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター 病虫害防除部主任研究員
堀内誠三	H14. 4	東北農業研究センター 水田 利用部 業務科長	前川和正	H14. 4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター 病虫害防除部主任研究員
中島 隆	H14. 4	九州沖縄農業研究センター 地域基盤研究部 上席研究官	神頭武嗣	H14. 4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター 病虫害防除部主任研究員
荒井治喜	H14. 4	九州沖縄農業研究センター 地域基盤研究部病害 生態制 御研究室長	久野託靖	H14. 4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター 病虫害防除部主任研究員
川崎信二	H14. 4	農業生物資源研究所 生理機 能研究グループ 上席研究官	西口真嗣	H14. 4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター 病虫害防除部 北部農業技術 センター駐在
野田孝人	H14. 4	国際農林水産業研究センター 企画調整部 連絡調整科長	高木 廣	H14. 4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター 病虫害防除部 淡路農業技術 センター駐在
若生忠幸	H14. 4	農林水産技術会議事務局 研 究調査官	入江和己	H14. 4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 農業技術センター 経営・機械部主幹研究員
岩野正敬	H14. 6	中央農業総合研究センター 北陸水田利用部長	塩飽邦子	H14. 4	兵庫県立農林水産技術総合セ ンター 部長(生物工学担当) 付主幹研究員
(植物防疫所関係等)					
星野智士	H13.10	横浜植物防疫所 大和圃場 業務部 種苗担当	岩本 豊	H14. 4	兵庫県北播磨県民局 社農林 振興事務所 西脇農業改良普 及センター主査
後藤正昭	H14. 4	横浜植物防疫所 成田支所長			
君島悦夫	H14. 4	生産局 植物防疫課課長補佐			
(3) 都道府県試験研究機関関係					
河野 満	H14. 4	三重県農業大学校 助教授			

- | | | | | | |
|------|--------|---------------------------------|----------------------|--------|--|
| 佐古 勇 | H14. 4 | 鳥取県農林水産部農政課 普及技術指導室病害虫防除所駐在 | 原沢良栄 | H14. 3 | 新潟大学 博士 (農学) 発生初期の流行過程に基づいたイネいもち病 (葉いもち) の防除 |
| 渡辺博幸 | H14. 4 | 鳥取県農林水産部農政課 普及技術指導室園芸試験場駐在 | 山口純一郎 | H14. 3 | 九州大学 博士 (農学) ナスすすかび病の発生生態と防除に関する研究 |
| 粕山新二 | H14. 4 | 岡山県農業総合センター農業試験場 北部支場長 | 厚井 融 | H14. 3 | 東京農工大学 博士 (農学) フェイトプラズマの遺伝子解析と系統解析および免疫学的検出 |
| 那須英夫 | H14. 4 | 岡山県農業総合センター農業試験場 病虫研究室長 | 佐々木信光 | H14. 3 | 京都大学 博士 (農学) Roles of movement protein gene in cell-to-cell movement and host-range determination of bromoviruses |
| 伊達寛敬 | H14. 4 | 岡山県農業総合センター農業試験場 北部支場 中山間農業研究室長 | Tri Asmira Damayanti | H14. 3 | 京都大学 博士 (農学) Studies on generation, amplification, and packaging of brome mosaic virus defective RNAs |
| 梶谷裕二 | H14. 4 | 福岡県農業総合試験場 果樹苗木分場 | 吹谷 智 | H13. 9 | 北海道大学 博士 (農学) 日本産イネいもち病菌を用いた宿主特異性及び病原性に関わる遺伝子の同定と解析 |
| 下村克己 | H14. 4 | 福岡県農業総合試験場 園芸研究所 野菜花き部 | 畑谷達児 | H13.12 | 北海道大学 博士 (農学) ジャガイモ Y ウイルスえそ系統と普通系統の分子性状比較とゲノム RNA 間組換えに関する研究 |
| 安藤俊二 | H14. 4 | 退職 (大分県農業技術センター 次長兼植物防疫部長) | 岩本 晋 | H14. 3 | 筑波大学 博士 (農学) モミ属落葉分解菌 <i>Thysanophora penicillioides</i> の分子生態学的研究 |
| 挾間 渉 | H14. 4 | 大分県農業大学校教授 | Wahyuno, Dono | H14. 3 | 筑波大学 博士 (農学) A taxonomic study on <i>Phragmidium</i> species (Uredinales) parasitic on the genus <i>Rosa</i> (バラ属植物に寄生する <i>Phragmidium</i> 属さび菌の分類学的研究) |
| 加藤徳弘 | H14. 4 | 大分県農業技術センター 植物防疫部副部長 | 堀内秀紀 | H14. 3 | 東京農工大学 博士 (農学) Propagation of plasmid-like double stranded RNA in rice |
| 上原勝江 | H14. 4 | 沖縄県病害虫防除所 所長 | | | |
2. 学位取得者 (課程博士・論文博士)
- | | | | | | |
|-------|--------|---|--|--|--|
| 岸本久太郎 | H14. 3 | 東京農工大学 博士 (農学) イネ・キチナーゼ遺伝子導入キュウリ植物における菌類病抵抗性の発現機構に関する研究 | | | |
| 加藤公彦 | H14. 1 | 東京大学 博士 (農学) トスポウウイルスおよびジェミニウイルスによる数種新病害の病原の性状とその防除に関する研究 | | | |
| 堀田光生 | H14. 2 | 東京大学 博士 (農学) ナス科植物青枯病菌の遺伝的多様性に関する研究 | | | |
| 横井寿郎 | H14. 3 | 東京大学 博士 (農学) イネ病原菌類ウイルスのゲノム構造に関する研究 | | | |
| 松尾和敏 | H13. 9 | 鹿児島大学 博士 (農学) 暖地ハウスメロンにおける「えそ斑点病」の発生生態学的研究 | | | |

- 植原健人 H14. 3 東京農工大学 博士(農学)
ネグサレセンチュウ属の遺伝子解析および簡易同定法に関する研究
- 一色淳憲 H14. 2 愛媛大学 博士(農学)植物・糸状菌間相互反応におけるエンドポリガラクトナーゼの病理学的役割
- Saranya Nulumpang H14. 2 愛媛大学 博士(学術) Molecular characterization of citrus polygalacturonase-inhibiting protein

【JGPP 原著編集委員 Noel T. KEEN 博士の逝去】

本学会の学会誌が JGPP に移行して以来、原著編集委員として御活躍頂いた米国カリフォルニア大学の Noel T. KEEN 博士が平成14年4月18日に急逝されました。同博士には、特に当学会の感染生理学分野の発展を永年にわたり支援していただきました。慎んで御冥福をお祈り申し上げます。

なお、米国植物病理学会に、同博士を記念して基金が設立されました。JGPP 第68巻第2号の追悼記事に記載してある Web site に、醸金(きょきん)申込書があります。ファックスまたは郵送で申し込めます。クレジットカードでの支払いも可能です。

【書評】

1. 白田昭著「微生物に学ぶ」, 4-6 変判, 270頁, 発行: 2001年9月 (株)工業調査会, ¥2,200 (税別)

いま、われわれの生活の場で食の安全性、環境問題が強く意識されている、一方、最近の生命科学の進展は著しく、一般紙の新聞にも科学記事が数多く取り上げられている。科学技術会議はこれからの日本を技術立国として再生するための科学政策として、ライフサイエンス、情報通信、ナノテクノロジー・材料、環境の4分野を強かに押し進めることとしている。研究者は自分の研究分野の深化はもとより、周囲の科学の進展に常に注目しなければならない状況にある。このようなときに、生物のもつ多様性に富んださまざまな興味深い事象について、分かりやすい文章で丁寧な微生物世界に広がる話題を10にとりまとめて紹介したのが、本書である。本書には、第1話の「生命の誕生と進化」から始まって、第3話「微生物の不思議な機能」、第4話「共生という名の相互作用」、第6話「微生物が作り出す機能性成分とその利用」、第8話「細菌と抗

生物質の攻防」、第9話「微生物農薬」、第10話「環境保全と修復」まであり、それぞれの話題の中に4項目から8項目にわたる興味ある話題が取り上げられている。例えば、第7話「毒素を作る微生物」では、「病原細菌の毒素は恐ろしい」、「フグ毒は細菌が作る?」、「穀類とカビ毒」、「好き嫌いがはっきりしている植物病原菌毒素」、「微生物も毒素でやられる」、「紅茶色素はボツリヌス毒素を中和する」を取り上げているが、筆者の専門分野に近いこともあって経験をふまえた文章と写真で読者を引きつける。また、「細菌のべん毛は回転する」(第3話)では、運動機関の話題から簡潔な研究史、べん毛の性質、べん毛回転構造、回転効率、そして利根川進氏の基礎研究の話題におよび筆者の心意気が存分に発揮しており、素直に読み進めることができる。また、微生物がエチレンや石油を生成するテーマ(第5話、微生物とエネルギー源・金属資源のかかわり)をはじめ、各項とも話題の進め方が研究に携わった研究者の思索と研究の足跡が分かり易く述べられ理解を助けてくれることは喜ばしい。しかし、「環境保全と微生物」の「農業資材としての微生物」中で、EM菌についてかなりのスペースを割いて有用性について紹介している。筆者は、これに疑問が投げ掛けられていることも紹介し科学的データを求めるとしているが、日本土壌肥料学会は「EM菌は微生物資材として評価にたえるものでなく、その有効性は証明されていない」との見解を公表している。折角の科学的な本書にとって、EM菌の記載はおおきなマイナス点になっているのは残念である。また、1988年、ヨーロッパの海でアザラシの大量死は「食物と一緒に摂取したPCBがアザラシの脂肪に蓄積され、それが血液中に放出され免疫系を破壊したのだ。そのため、通常感染することのないモービルウイルスに感染したと考えられる」とあるが、モービルウイルス専門家によれば「免疫機構の低下とウイルス感染性については何の証拠もなく、感染しないモービルウイルスが感染したのでなく、モービルウイルスは本来致死性の高いウイルスであり、アザラシと遭遇したことによる」という。環境問題には、立場の違いから種々な意見が分かれるところであるが、専門から離れた記事の紹介には、より慎重に記述することを感じる次第である。いずれにしても、本書は筆者が述べているように「微生物の世界では、不思議なこと、アッと驚くことがいっぱいあり、この不思議さとそのタネを知る楽しみを味わう」には十分なものであることは保証したい。特に、若い人たちに生物科学に興味をもってもらうには恰好な本であろう。文章は大変読みやすい文体となっていることは読者に負担をかけない、さらに、話題ごとに参考文献の記載と索引があ

るのは、本書の利用を高める上で大変結構である。「微生物に学ぶ」の続版の出版に期待したい。(鈴木孝仁)

2. 岸 國平著:「植物の寄生体たち—植物病理学の挑戦—」, 四六判, 254 pp., 発行: 八坂書店, ¥2,400

本書は植物と寄生体が織りなす世界の物語である。著者はわが学会の大先輩であるが、今もルーペを片手に採集に出掛け、自宅で寄生体を観察・分離・培養・接種して学会で発表されている。その先輩が、一人でも多くの若者がこの世界に興味を抱き、未知の世界に挑戦してくれることを願って送られたメッセージである。

大きくは3部から構成されているが、冒頭に「植物と寄生体たちの世界」が序章的に述べられている。第一部では、アイルランドの飢餓とジャガイモの疫病、貴腐ワインの秘密、黒斑病に強い二十世紀梨の育成、病気に強いイチゴの育種、O-157とカイワレダイコンなど「食の歴史を変えた寄生体たち」7話が語られている。第二部は、クワ萎縮病の病原 MLO 発見、萎縮病ウイルス保毒温州ミカンのゴマ検定法、メロンの奇病の病原ウイルスの伝染経路など「植物の病気と寄生体」についての6話で構成されている。第三部では、CMVのサクラでの越冬、シバさび病菌のヘクソカズラとの寄主輪廻、エゾムラサキツジのもち病、病原菌に寄生する寄生体と微生物農薬など9話の寄生体たちの「不思議な共生の世界」が語られている。

どの話題も興味の輪がつつぎと広がって読者を放さない。平易な言葉で語られているが、行間には著者の自然を見る目、問題を解決するための緻密な実験計画、粘り強い意思と実行力がにじみ出ている。研究課題は現場から拾いあげ、結果は現場に返す姿勢で貫かれている。もっと若いときにこの本を読んでいたと悔やまれるのが、老会員の正直な読後感である。植物病理学はもちろん、自然科学の研究を志す学生や研究者に是非読んでいただきたい一冊である。(大畑貫一)

【会員からの情報】

「Pictorial Atlas of Soil and Seed Fungi」の第2版出版

米国で1994年に出版した著書 Pictorial Atlas of Soil and Seed Fungi (ソフトサイエンス社の土壤糸状菌の英語版) (写真) を、改訂、増補し、2002年4月 CRC Press (Lewis 出版社は姉妹会社) から第2版出版の運びとなりました。初版出版の経緯は、一部報告しましたが(日菌報 35: 277-278, 1994)、本書はもともと土壤病害の研究中に

取り扱った土壌や種子分離菌をまとめたものです。第2版にはそれ以降に関わったダイオキシシンやリグノセルロース分解菌研究の過程で得られた土壌分離菌についての知見も加えました。

改定版の特徴: 本書で取り上げた土壌菌は350種以上で、文献数を増やし、イラストもコンピューターで描き、しかも説明も付け加えました。また ATCC や MAFF など公的な菌株保存センターに登録済の菌株一覧を新たに掲載し、Index を追加しました。ページ数は411ページから592ページに増えました。値段は129.95ドルです。(渡邊恒雄)

【学会事務局コーナー】

1. 平成15年度学会費納入のお願い

本学会は会費前納制を建前に運営を行っております。平成15年度会費は、平成14年12月中に納入していただくことになっております。本年7月に「平成15年度学会費納入について」のお願いを送付させていただきました。平成14年度 定期総会において承認いただきました日本植物病理学会会則の新規程の施行により、平成15年度から本会に学生会員制度が新設されました。学生会員になるには、振込用紙の通信欄に指導教官の署名と確認印を受けたうえ、会費を振り込んで下さい。学生会員の方は、確認作業の複雑化を防ぐため、銀行からの自動引き落としは利用できません。すでに銀行からの自動引き落としを利用されている方は、平成15年度会費納入分から、郵便局の振込用紙でのお支払いを利用下さい。

2. 日本植物病理学会会員名簿

日本植物病理学会では、本年12月に学会会員名簿の発行を予定しております。全ての会員各位に本号(和文誌第68巻第2号)に綴じ込みました「会員の住所等変更届」の連絡をお願いしております。住所等に変更のある方はお忘れのないように返信いただきますようお願いいたします。平成14年度 定期総会において「平成15年度より、会員名簿は簡易電子印刷の形で毎年発行し、会員に無料で配布する」ことが承認されましたが、本年度発行します会員名簿も無料で配布します。本年12月発行予定の次号(和文誌第68巻第3号)に添付する形でお送りする予定です。

3. 平成14年度の学会幹事および事務局

平成14年度の幹事は、塩見幹事長、田中 穰、宇佐見俊行、吉田重信各庶務幹事、渡辺京子会計幹事の5氏となりました。事務局では、飯田典子、松原美穂の2氏が日本農薬学会、日本応用昆虫学会および日本植物病理学会の3学

会を担当しております。

平成12～13年度の幹事を担当された難波成任，植草秀敏，堀田光生の3氏には大変ご苦労さまでした。

4. 学会ホームページの御案内

日本植物病理学会のホームページ開設から3年余が経過し，この間に3万件に近いアクセスを頂きました。従来から会報発刊の案内，研究集会の開催案内，学会運営に関わるお知らせ等を掲載しておりますが，最近ではWEBを通じての住所等の変更もできるようになりました。今後も出来るだけ大勢のかたがたに利用していただけるようなホームページを目指して，迅速な情報提供や会員向けサービスの充実に努めて参りたいと考えております。会員の皆様もホームページに関する御意見や情報のご提供等をよろしくお願いいたします。

URL → http://pps.j.ac.affrc.go.jp/PPSJ_J.html

【学会ニュース編集委員会コーナー】

編集委員会報告

4月5日，12時から約一時間，学会ニュース編集委員会が開催された。新旧幹事の紹介が行なわれた後，一年間の編集経過報告がなされた。昨年度は海外の関連学会において学会賞を受賞された会員が複数名おられたが，そのご紹介文について第三者にお願いするのをご本人にお願いするのか委員会内に多少の戸惑いがあった。そこで今後の方針について改めて検討した。また，[書評]は，学会員の紹介であれば非学会員の執筆した書籍についてもその掲載を認める（2001年の委員会です承済み）こととし，紹介文の執筆者は原則として著者が手配するものとし，学会事務局は全く関与しないことを確認した。

情報提供および投稿のお願い：

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物の御紹介，書評，会員の動静，学会運営に対する御意見，会員の関連学会における受賞，プロジェクトの紹介など情報をお寄せいただきたくお願いいたします。

投稿宛先：〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

日本植物病理学会事務局

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

松山宣明，竹内妙子，塩見敏樹，田中 稔，
宇佐見俊行各委員宛

編集後記

第19号では，本年4月名誉会員に推挙されました加藤 肇氏，永年会員に推挙されました井上忠男，長江春季，下村 徹，土屋行夫，山本英夫，吉田孝二各氏のご略歴とお言葉を掲載させて頂きました。諸先輩におかれましてはご健康にはくれぐれもご留意下さり今後とも倍旧のご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます。

本年4月から編集委員の一部の方々が交代しました。旧編集委員の難波成任，渡辺京子さん，長い間のご協力ありがとうございました。新たに編集委員になられた竹内妙子，宇佐見俊行さん何卒よろしくお願い致します。
